

研究課題	思春期の自閉症スペクトラム児の 仲間関係構築への支援と有効性の検証
研究代表者	井瀬 知美 (心理社会学部 臨床心理学科 准教授)

## 1. 研究目的

自閉スペクトラム症は対人関係やコミュニケーションに困難をもつ障害である。他者と良好な関係を安定的に築くことができないために、不安や抑うつ感といったメンタルヘルスの問題を抱えやすく、思春期のころには不登校や引きこもりといった内在化される問題や非行という形で外在化した問題を発現するリスクが高い。それら二次的な問題を予防するためには、彼らのもつユニークな認知特性を理解し、彼が自尊心を損ねることなく成長していけるような心理社会的支援が確立されることが求められている。特に、我が国では知的障害のない若者、高等教育を受けるが社会のなかで適切な対人関係を築けず孤立する若者の問題が深刻化している。本研究では、UCLA で開発された思春期の自閉スペクトラム症児を対象とした仲間関係の構築を支援するプログラムをもとに、わが国での実践とその有効性を確認することを目的としている。

## 2. 研究方法

本研究は3年計画である。

(1) 2019年度：思春期の仲間関係の課題や介入法についての調査を行う。具体的には、①ペアレント・トレーニングを修了したあとのフォローアップグループ（思春期グループ）であげられる思春期の課題についてまとめる、②UCLA で開発された PEERS プログラムの研修を受け、開発者である Laugeson 博士および他の研究者とわが国での実践可能性を検討する。

(2) 2020年度：PEERS プログラムの実施（トライアル）

PEERS プログラムをもとに、わが国における14歳～18歳年代の自閉スペクトラム症と診断された若者を対象に、大正大学カウンセリング研究所で PEERS 思春期版を用いたグループを実施する。2020年度はトライアルであり、毎回のセッションの応答や進行具合を分析すること、セッション前後のソーシャルスキルの変化や日常生活における影響を測定する。使用する尺度は、対人応答尺度 (Social Responsive Scale)、自閉症特性を測る ASQ (Autism Spectrum Quotient)、CBCL4-18 (Child Behavior Checklist)、Vinland 適応行動尺度 II を予定している。また、今年度はトライアルであるため、参加した保護者と子どもそれぞれにプログラムに参加したことがどのような体験であったかをインタビュー調査し、日常生活に及ぼす影響と、プログラムでどのように学びが進んだかのプロセスを分析する。

(3) 2021年度：PEERS プログラムの効果検証

大正大学カウンセリング研究所で、PEERS プログラムを受講することで、どのような効果があったかを検証する。ウェイトリングリストコントロール法を予定している。年度当初に参加希望者を募集し、PEERS プログラムを受講した群とウェイトリングリスト群とでプログラム実施期間（約3か月）の前後で、ソーシャルスキル、自閉症の特性の強さ、日常生活における QOL や適

応行動の得点で比較する。さらに、ここまでのデータを基礎データとして、再来年度以降、研究協力を得られる機関を増やして、地域での実践につなげられるような研究として進めていきたい。

### 3. 研究成果と公表

今年度は、(1) 思春期グループの実践からみえてくる課題の整理、(2) PEERS プログラムの研修と実際のグループへの参加から得られたこと、の2点を成果として報告する。

(1) 思春期のASD児をもつ親の困りごと；ペアレント・トレーニング思春期グループから

通常のペアレント・トレーニングは4歳～10歳で実施しており、全10セッションのグループを修了した保護者が自由に参加できるフォローアップグループを運営してきた。しかし、次第に該当児の年齢があがってきたため、現在は、通常のフォローアップグループと、原則11歳以上(小5以上)のお子さんを対象とした思春期グループとに分けて運営している。今年度は、思春期グループで語られた保護者の困りごとを分類することで、思春期の支援ニーズについてまとめる。

#### ①実施概要

2019年度は1回目4月27日(参加者7名、該当児7名)、2回目7月27日(参加者15名、該当児17名)、3回目9月14日(参加者4名、該当児4名)、4回目12月14日(参加者9名、該当児10名)、5回目2月22日(参加者6名、該当児6名)の計5回の開催、延べ人数41名(同胞も発達障害の診断ありできょうだいのことで参加している場合もあるため、該当児は44名)が参加した。

参加者の子どもの学年で分類すると、小5・小6以上の前思春期の保護者が約10%、中学高校生年代の保護者が約70%であった。思春期の課題を分析するのに適したグループであるといえる(表1)。多くの保護者が思春期以降に相談できる場がないことを訴えており、年5回という限定された会ではあるが、保護者が安心して悩みを語り話し合える場を提供しているといえる。

表1. 該当児童の学年と人数

小4以下	小5・小6	中学生	高校生	計
9人 (20.5%)	5人 (11.40%)	10人 (22.7%)	20人 (45.50%)	44人

#### ②グループ内で話題となったテーマ

グループでは、近況報告、保護者からみて好ましい行動の変化や現在困っていることなどが語られる。小5以上の子どもの保護者の発言から、困っていることとしてあげられたものは主に、次の4つの領域であった；

1. 身の回りのこと(例. ごみを捨てる、身体を清潔にする、適切な服装を選ぶなど)
2. 感情のコントロールに関すること(例. 辛いことがあったときにそれを伝えられるようになってほしい、暴言や八つ当たりかんしゃくではなく言葉で伝えてほしいなど)

3. 対人関係に関すること（例. 不安や怒りを家族にぶつける、アドバイスを求めたからしたのに暴言となった、友だちがいない、クラスで孤立している、異性との付き合いに関してなど）

4. 時間や行動の管理に関すること（例. 約束が守れない、時間通りに動けない、パソコンやスマホが止められないなど）

思春期の子どもにとって、友だち関係は重要な要素であり、仲間関係がうまくできているときは、苦手なことがありながらも友だちに助けられ、友だちに相談しながら、日常生活を適応的に送っていくことを促進している。しかし、クラスで孤立する、引きこもり気味なるなどの状況になったときに、不安や怒りとあいまって身近な家族への問題として出やすいこと、また、家族もそのことに反応して子どもを刺激するなど、悪循環が起こりやすいことがうかがわれた。

仲間関係を支えていくことを軸に、そのために身の回りのことを整える、感情を自分で扱えるようにし適切な表現方法を身につける、時間や行動の管理をある程度心掛けて取り組むなどのモチベーションにつなげていけるのではないかと思われた。

## （2）PEERS プログラムの研修と実際のグループの陪席

2019年10月～12月の3ヵ月間、PEERS クリニックのある UCLA に滞在し、3日間の研修（PEERS for young adult）、毎週の PEERS のセッション（PEERS for adolescents / PEERS for young adults）に陪席し、実際のグループの運営と進行について学ぶことができた。

PEERS クリニックでは、グループに8～10名が参加していた。運営にあたっては、グループを運営するファシリテーターが2名いるが、それ以外に、参加者をサポートするクリニックのスタッフが4名いる。なかには大学院の学生もいて、彼らはボランティアとしての参加であり、実際に自閉スペクトラム症の思春期の子どもたちと接することで学びを深めることができるといっていた。PEERS では、ロールプレイ（適切なスキルをつかったやり取りのロールプレイと、不適切なスキルをつかったやり取りのロールプレイ）を院生が行うが、年齢が近いこともあり、親近感をもって、子どもたちはロールプレイをみることができおり、活発な意見が出されていた。また、自分の好きなものをひとつもってくるという宿題があり、後半はそれについて紹介しながら会話のスキルを復習するのだが、その際に3人ずつくらいで小グループを作り、スタッフが各グループについて、会話のスキルがうまくつかえているときにフィードバックをしたり、会話が滞っているときにさりげなくサイン（ホワイトボードに書かれているので、そこを指し示すなど）を出したりして、小グループでの活動がスムーズにいくようにサポートしていた。コミュニケーションが苦手な自閉スペクトラム症の子どもたちであるが、小グループでの会話を楽しそうに進めているのを見て、彼らが学べるような支援の有効性と必要性を改めて感じた。スタッフは、常に **errorless learning**（失敗のない学習）をサポートしていると話していたが、そのための工夫を随所に発見することができた。さらに、印象に残ったのは、グループの最後に5分程度であるが、親子が一緒になり、今日のセッションのトピックと次回の宿題について共有する時間がある。この時間帯に、各親子にだれかスタッフが付き、質問や確認などの作業を行っていることであった。グループのなかで曖昧だったことや、宿題を通して困ったことがあったときにスタッフに相談で

きる時間があることは親子のプログラムの参加を支えているようにみえた。

思春期という年代を考えると、大学生がグループにいることは、子どもたちの参加するモチベーションを高めるものであるといえる。また、事前ミーティングを行い、個々の参加者への注意点を共有したり、ロールプレイのリハーサルを行ったり、参加者が学べるようにチームで準備をして取り組んでいたが、それらの準備から実際のグループまで通して参加することで、スタッフ自身も学びを深めていることがわかる。特に、大学院生にとって、座学だけではなく、リアルな場で学べるという点は、教育的な効果も大きいといえる。

開発者である Laugeson 博士は PEERS を文化的、社会的に現状に即したものにしたいと、**Ecological validity** を重視しているが、実際に参加して、その重要性を認識することができた。わが国で導入する際に、その視点をもってプログラムの実施を検討していきたいと考える。

成果発表に関しては、2020 年度に試みとして思春期グループを実施予定であり、その結果を学会発表することを予定している。

#### 参考文献

Laugeson, EA et al. (2012) : Evidence-based social skills training for adolescents with autism spectrum disorders: the UCLA PEERS program. *Journal of autism Developmental Disorders*, 42(6), 1025-36

ローガソン, EA 他 (2018) : 友だち作りの SST—自閉スペクトラム症と社会性に課題のある思春期のための PEERS トレーナーマニュアル. 金剛出版